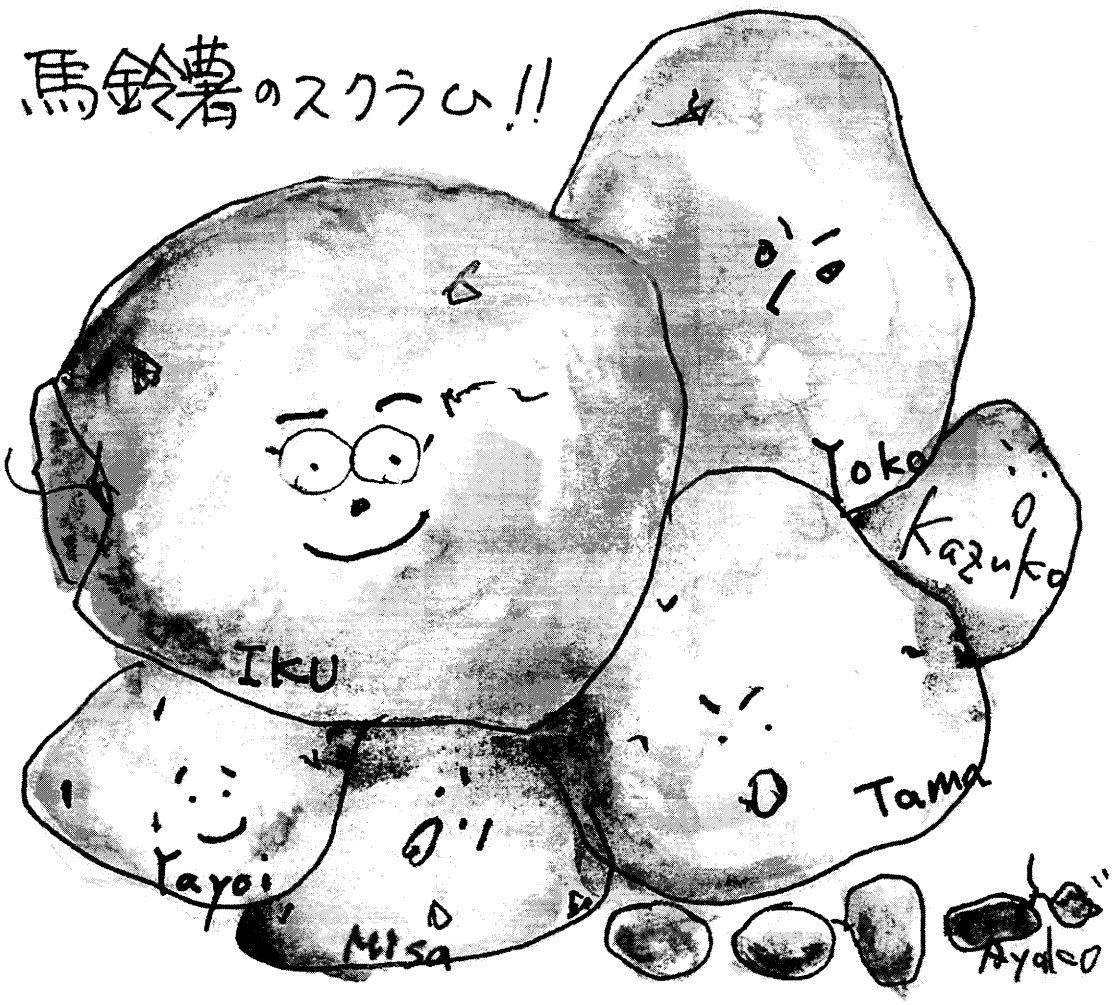
あぶらむ通信

第37号　2015年12月　　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県高山市国府町宇津江3225-1
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4494
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp



この夏のあぶらむの台所
絵：アヤコ・シマ

飛騨便り

2015年の今年も残り1ヶ月余、アッという間にあぶらむ通信をお送りする時季となりました。皆様にはお元気でお過しのことと思います。

晩秋の作業に、里内の落葉集めがある。あぶらむの里の敷地面積は昨年末購入した土地4,500坪を加えると約23,000坪(7.6ヘクタール)ほど、その内3分の2は山、残り3分の1はなだらかな傾斜地で、そこに建物や畑があり、里山を代表するコナラの林もある。木枯が吹くと里全体に枯葉吹雪が舞う、その量の膨大なこと。枯葉はそのままにしておくと水を含み、建物をいため、車をスリップさせる。せめて建物のまわりや道路だけは落葉集めをしなければならない。今年は「落葉集めパーティー」と称して東京からの加勢も得て、総勢10人余で丸2日間の落葉集め。大型ホイル・ローダーのバケット30杯ほどの量、これを林内につくねて腐らせ堆肥として数年後に畑や田へ還す。営々とした自然の営みである。落葉を集めながら心卑しい私の思うことは「この葉っぱせめて一円札であってくれたらなぁー」と。

○子ども達と「あゝ野麦峠」

近年の私のキーワードは「想像力」である。補導委託で家庭裁判所から半年間預かる少年に対して裁判所が求めるものは、少年の更生と共に「被害者への謝罪の気持を」である。自分のやったことが相手をどれほど傷付け、痛みや悲しみを与えたのか、一つにはそれは加害者の想像力によってしか理解できないものと私は思う。しかし、今日のように多くの分野で多くのものが専門化され部分化されると、全体像が分断化され想像力が育ちにくくなってきているように思われる。あぶらむが「お米ができるまで」にこだわるのはこのためである。家裁少年を見ていると心の荒れ様は食事の仕方に現れる。心が荒れすさんでいる少年の食事の仕方は一言でいってきたない。食べちらかしたり、好きなものだけは他の者のことなどおかまいなし。しかし、種をまき苗を植え、育てるために手間をかけると気がつくといつしか食べ方が美しくなっている。一つのものができるプロセスを踏めばいつしかそこに「想像力」が育まれ、それをつくり育てた人々の労が少しは理解できるからだと私は思っている。

10年ほど前、ネパールが政治的に混乱し、「子どもから大人までのネパールの旅」ができなくなった時、私は沖縄の渡嘉敷島で子ども達とキャンプ・プログラムを持った。その島は太平洋戦争の時、沖縄戦の口火となり多くの島民の集団自決を生んだ島だった。キャンプ地から集団自決の島中央部まで片道10km、私たちは多くの犠牲者を偲び徒歩で往復することにした。出発の前夜、私は子ども達に1945年3月28日に起った悲劇について話してきかせた。小学生特に低学年の子にとっては20kmの歩きは大変辛いことと思う。しかし誰一人として弱音をはく子はいなかった。人は心に何かを感じるとからだはそれに応じようとすることを知った。

夏の子どもプログラム「あぶらむ里山自然学校」、その一つに登山やウォーキングがある。昨年は乗鞍岳(3,026m)に挑戦したが天候不良のため断念、今年は野麦峠の旧道6kmを歩くことにした。明治中期から戦前にかけてこの飛弾の地から、今でいえば中学卒業したての少女たちが「糸くり女工」として沢山信州岡谷の地に出稼ぎに行った。娘らのその労働が近代

日本の一部分を支えたのであった。

今、私たちが享受している豊かさの背後にどれだけ多くの人々の労苦があるのかを伝え学ぶことも大切なことと私は思っている。出発前夜、子ども達に大竹しのぶ主演映画「あゝ野麦峠」の一部を見せた。その冒頭は猛吹雪の中を野麦峠を超えるシーンから始まる。私は映画を見るよりも、それを見る子ども達の表情を見ていた。幾人もの子どもが前のめりに身を乗りだすようにして見ていた。その姿を見て感動した。幼稚園年長さんを先頭に誰一人として泣き言を口にすることもなく、その昔年若い女工さん達が必死に歩いた道を歩ききった。子ども達一人々の心の中にどんなおもいがあったのだろうか…。

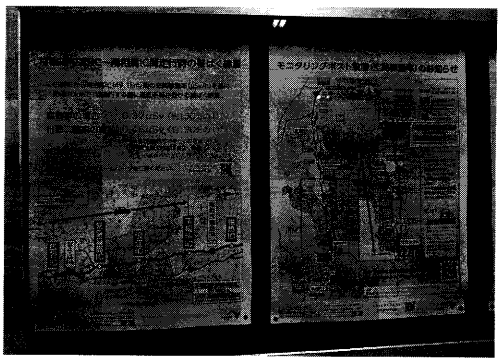
その昔、女工さんたちが冬の峠道を命がけで歩いた道を歩く自然学校の子ども達。野麦峠旧道6km、ウォーキングコースとしてもおすすめです。

○福島原発被災地を訪ねて

「原発被害で外で遊べない被災地の子をおもいっきり外で遊ばせたい」、そんなおもいと願いをもって日本聖公会東北教区司祭で福島県郡山で司牧しておられる越山健三牧師とその同労者で小名浜で働く岸本望執事があぶらむを訪ねてこられた。原発被害のこと、気にはなっていながらもどのように関わればよいのかわからなかった私にとって、あぶらむのこの環境の中でおもいっきり遊ばせたいということ、あぶらむにとっても願ったりかなったりだった。

「その前に一度現場を見てもらえたら…」、津波の被災地はこれまで3度訪ねたのだが、原発被災地はまだだった。

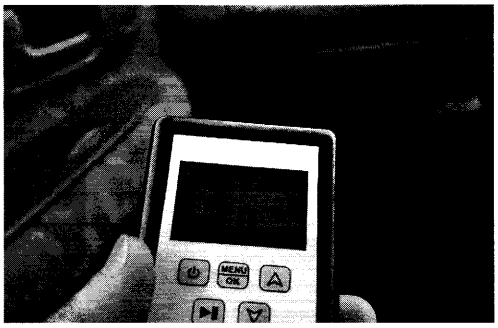
10月16日、看護学校のあぶらむ宿泊研修が終った翌日訪ねる事にした。飛弾は地理的には日本列島のド真中、どこへ行くにも近そうなものなのだが日本有数の交通僻地。福島への近道は富山へ出て北陸自動車道で新潟へ、そして磐越自動車道で郡山、490kmを走るのが一番早い。時間と費用を計算するとバイクが早くて安い。しかし、バイクでは原発被災地を走ることはできないのである。未だ放射線量が高いのでからだ丸出しのバイクや歩行者は危険なのである。郡山と小名浜の教会を司牧されている越山牧師が車で被災地を案内して下さった。郡山出発の時車内にしっかりと放射線量を測る線量計がセットされた。そのこと一つとっても異様だった。「自然界での放射能は最大0.025マイクロシーベルト、ここ郡山は0.25。チェルノブイリは1.5、この線量計は1.5マイクロシーベルト以上になると警報音がでるようになっています」。



通行に関する放射能情報。これだけでも異常さを感じさせられた。

磐越道から常磐自動車道へ入りいわき中央で降り国道35号線「いわき浪江線」を北上した。浪江、富岡、楢葉町と、ニュースでよく耳にする原発被災地の地名が出てきた。道路には電光掲示板の温度計や交通案内ではなく「放射線量

計」、2.45マイクロシーベルトとか3.25とか異常な数値ばかり。手元の線量計の警報音は鳴りっぱなし。そんななかでも警備の警察官は無防備のまま立ちんぼうだった。車を止め車外に出ることは禁止されていたが外に出てみた。どこもここも異常、異様だった。津波被災地ははっきりしていた。全てが打ち壊されていたから。しかし原発被災地は新築のままの家を含め町並み家並みがそのまま在るのに人一人いないのである。家の庭におい茂ったセイタカクダチソウが異常な背丈だったのが印象的だった。チェルノブイリは1.5マイクロシーベルトで今だ村が封鎖されているというのに、事故をおこした福島第一原発が遠望できるところあたりはスポットで7.4マイクロシーベルトだったのには絶句した。何か気分が悪くなってきた。「大丈夫ですヨ、放射能はすぐに症状として現れるものではないとのこと、専門家に云わせれば気持の問題なのですって」、越山牧師はそういってくれたが、気持の問題なのかもしれないが気分が悪くなった。5時間余のドライブを終え郡山へ帰り、GSで洗車した。「車についた放射能を洗い流さないと…」、洗い流したその放射能はどこへ行くのだろうか…。何と表現してよいかわからない体験だった。なのに私たちはこの原発事故がなかったかのように原発再稼働に踏み切った。広島、長崎、福島と世界で一番多くの放射能被害を受けているというのに、私たちはこれ以上どれだけ痛い思いをすれば骨身にしみるのだろうか、私にはわからない。ただせめて来年夏、あぶらむで思いっきり戸外で遊びまわる原発被災地に生きざるを得ない子ども達を心から受け容れ応援するしか今の私には能がない。



車内の線量計は4.57マイクロシーベルト、チェルノブイリの3倍だった。

無人の町、こんな光景が50km以上続いた。

さて、今年は「戦後70年」の区切り年、その年に生まれた私たち同級生は「古希」を迎えた。小学校卒業以来58年、初めての同級会をもった。男はすっかりハゲあがり、女はしっかりとオバーさんになっていた。自分だけはそうじゃないと思っているのだから、馬鹿としかいいようがない。でも「自分だけは」という気持があるから神経症にもならずどうにか明日に向える事ができるのでしょうね。それにしてもおどろきです、この自分がそんな年齢を迎えるようになったなんて…。

「少年法改正」以来、急に少なくなった家裁少年の補導委託、しかし1年半ぶりに少年がやってきました。気持を新たにして頑張ります。

それではどうぞよいクリスマスを、そしてよい新年をお迎え下さい。

2015年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

沖縄におもうこと

私にとって沖縄との出会い、とりわけ愛楽園というハンセン病療養所に生きた人々との出会がなければ、人生の旅人支援を目的とするこの「あぶらむの会」設立は絶対に在り得なかったと思っている。だから、新聞やテレビニュースで「おきなわ」という文字が第一番に目に入る。私にとって大切なこの沖縄が今大きな危機に直面している。辺野古の海の埋立てをめぐっての政府との対立、いや全面戦争である。両者のやりとりを見ていて私は40数年前のことが思い出されてきた。

私が初めて沖縄を訪ねたのは1968年2月、沖縄の日本返還が1972年7月29日だからまさに沖縄激動の時だった。今日、沖縄へはシニアー割引を使えばヒコーキで片道13,800円で行けるが、当時は晴海からの船で2泊3日、2等船室のゴロ寝部屋で片道12,000円ほどだったように記憶している。船が那覇港外に着くと食堂前に長い列ができた。船内での入域手続きだった。誰もが黙していて何かピンと張り詰めたような雰囲気だった。そしてこの雰囲気が帰路晴海下船となると一変した。

当時は多くの大学で大学紛争真最中、その影響もあってか沖縄からの本土留学生達の祖国復帰運動にも激しいものがあった。那覇から東京までの2日間、彼ら本土留学生達は沖縄の負ってきた歴史やその中での不当な差別的扱い等について乗船客に熱く語った。そして晴海で下船となるやパスポートを船上で焼き捨て、強行上陸を目指し、警備の機動隊と激しく渡りあった。(当時沖縄へ行くにはパスポートが必要だった。外国行きはパスポート、沖縄へは身分証明書という用語をもって区別した。)自分の国に上陸するのになぜパスポートが必要なのか、パスポートを持たされること自体が差別であることを彼らは主張したのであった。機動隊との激しい渡り合い、見ていて心が痛んだ。

沖縄での「祖国復帰運動」が激しかったその当時、沖縄に一つの論調があった。それは自分達が祖国として復帰しようとしている日本国は「自分達の祖国として復帰に価するか」という主張だった。それまで自分の生まれ育った国を空気や水のように思っていた私にとって、新たな視点から「我が生まれし国」を見つめる大きな機会となった。沖縄の人にとって日本国は「祖国として復帰するに価するか」という問いの出どころは、明治期における「先島分島問題」という清国(中国)と明治政府日本との間における琉球列島の分割譲渡問題にあった。

沖縄の人たちをして「日本という国は祖国に価するのか」というショッキングな発言のその根拠を知るため、その当時に未だ青年だった私、1968年発行の「沖縄歴史研究5号」に掲載の上原兼善の論文を読んだ。定価50セント(180円)だった。

「先島分島問題とは」—

沖縄本島、北端の辺戸岬から南端の喜屋武岬まで約150kmほど。細長い小さな島だが宮古・八重山の周辺諸島を含め小さいながらも立派に沖縄は「琉球王国」をなしていた。小国として生きのびる業として、中国(清国)日本(江戸幕府)に両属するという二足のワラジをはきながらの高度な政治的手腕を発揮してきた。そんな沖縄(琉球)に対して明治政府は1879年(明

治12年)、琉球藩の廃止を宣言し、藩王の琉球列島に対する支配権を強制的に接収した。いわゆる「琉球処分」である。その中核にあるものの考えの一つに「民族統合の理念」があった。中国からの文化的影響を色濃く受けてきた琉球だったが、琉球列島に住む人々は日本人であると。帝国主義の嵐の吹き荒れる中にあって小国琉球が独立を維持することは不可能であり、強制的であれ「民族統合の理念」ということで日本国に統合されたことは仕方がないこと、それでよかったと私は個人的に思っている。しかし、ならば同一民族として平等、公平に扱うべきであって、問題はそれから後のことである。

明治新政府の外交課題は徳川幕府時代に列強諸国との間に結ばれた不平等条約解消にあった。しかしその一方、中国、韓国との間に不平等条約を結ぶためにいろいろと画策なされた。特に中国との間では明治4年に締結した日清通商条約に、最恵国待遇条約を盛りこませるため、(琉球処分後の)清国の琉球に対するなみなみならぬ関心を見て、琉球問題をエサにして最恵国条項挿入を策動したのである。わかりやすくいえば日本国の利益のため、沖縄を中国へ売り渡すことを可としたのである。

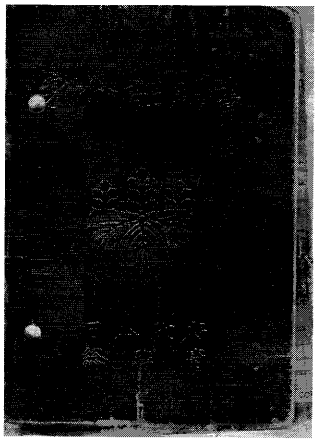
分島問題の最初は、宮古、八重山諸島を中国に、沖縄本島以北を日本にという「琉球二分案」だった。これに対して中国は自国へのメリットがないとして反対、次に提案されたのが「琉球三分案」だった。すなわち、沖縄本島に琉球王国を復権し、両国がそれぞれ領事を置いて共同管理を行い、それより南部は台湾に近いから中国が統治し、北部は九州に近接するゆえに日本の属地となすという内容であった。ここまでくればもうなりふりかまわずといった感じ、今日の尖閣諸島問題もゴミのようなものです。水面下でこのような秘密交渉があった中、時代は激しく動き沖縄分島など必要としなくなり、この問題は歴史の闇の中に埋もれていった。しかし売られた側の沖縄の人達は忘れてはいない。自分達の利益のために沖縄を売る国日本、それが「祖国に価するのか」。以後今次大戦で唯一の地上戦が行われ20万余の島民が犠牲になり、戦後日本の独立と引きかえにアメリカの施政権下に置かれた沖縄、そして現在もなお日本国土面積の0.6%しかない沖縄に、日本全国に在る米軍基地施設の74.7%が集中している。あの小さな沖縄の10.4%もの面積を米軍基地が占めているのである。

先日目にした本の中で「自然とは何か」という問いかけがあった。著者はずばり一言、「自然とは均一になろうとすることである」と語っていた。私にとって何か目からウロコのような気持だった。ここあぶらむの里を訪れる人々は「自然豊かで心癒される」というようなことを云われる。私も私なりに「人の心を癒す自然とは何だろう」ということを考えてきた。そんな中で出会った言葉、「自然とは均一になろうとすること」。風が吹くのも、水が流れるのもその均一になろうとする結果である。高低差がなくなれば風も水も流れることはなく、おだやかにゆったりとたまり湖となる。その視点で見れば人間社会も同じである。現在、世界各地で激しい紛争がおこっている。どれもこれも「均一になろう」としているように私にはおもえてならない。すなわち、他者に犠牲を強いて、自分だけ自分達だけよい思いをしようという時代は終りにしなければならないということである。

もうこれ以上沖縄に犠牲、負担を強いてはならないと思う。なぜか最近私が口ずさむ聖歌がある。

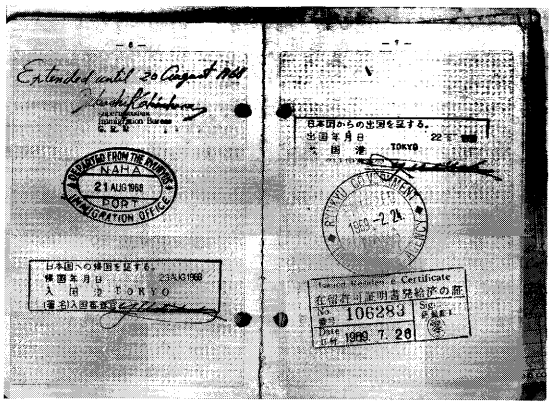
「主にのみ十字架を負わせまつり　我れ知らず顔にあるべきかは」（聖歌455番）

これからの人類の課題はこの均一化にあると思う。換言すればどれだけ欲望をおさえることができるか、どこで満足するかということであると思う。それにしても沖縄の負担は重すぎる。沖縄頑張れ！

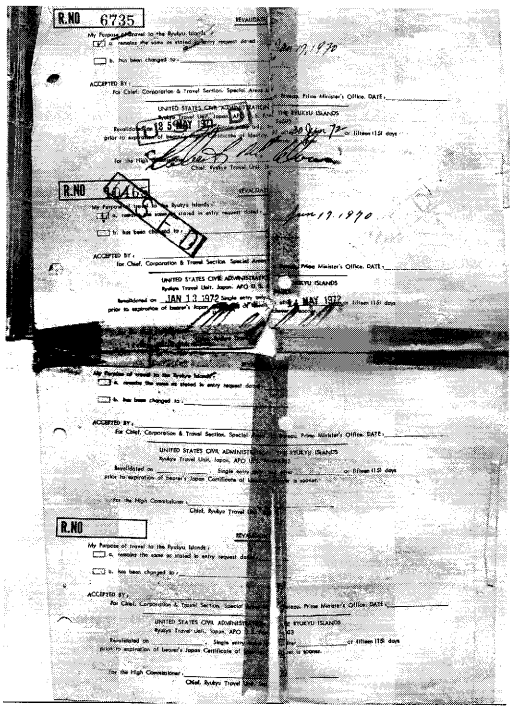


1968年ごろの沖縄渡航への身分証明書表紙。外国へのパスポートは菊の紋章だが沖縄パスポートは桐の紋章だった。

外国へのパスポートは日本国外務大臣だが、沖縄は内閣総理大臣の発行。どちらの方が重みがあるのか…。ちなみに写真は22才の私です。高倉健に似ているとか…!?



許される滞在日数は30日間だったと記憶している。それ以上の滞在となると延長を申請して「在留許可証明書」を所持しなければならなかった。同じ日本人でありながら本土から来る者は全くの外国人と同様だった。



沖縄渡航に際してはその度「ビザ」の申請が必要だった。たび重なる渡航に私は入国（域）管理官から執拗に入域目的をたずねられた。沖縄と本土日本は遠かったのです。

あぶらむ初級

島　文子

2013年ネパールの旅のことだ。チトワン自然公園で象の背に乗っている時、大郷先生が「島さん、あぶらむの自然学校で子供たちと壁画をかいてもらえないかな。」と。

ネパールの旅は実に多彩なプログラムが組まれていて、その中の一つには象に乗ってジャングル探検なんていうのもある。私が自然学校に係わるようになったのはこの象の背の上でゆらりゆらりとしていた時のことだ。こたつのやぐらをひっくり返したみたいな中に4人が支柱をまたいでそれぞれ4方向を向いて乗る。ゆらゆら揺れている時、先生はそう切り出した。同乗のN氏が「あ～、それはいい。」と、相槌を打った。「私、共同制作の指導は苦手なんですが・・・」と。でもこんなところで象から降ろされても困る、先生の作戦勝ちかどうかは分からぬが、「今年の夏、一度自然学校に行きます。」と、あいなった。

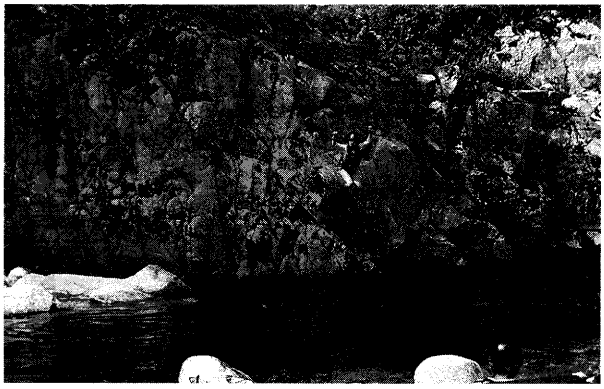
というわけで、私のあぶらむデビューは2013年と若い。もっともあぶらむの支援は10年ぐらいになると思うが、あぶらむの里に行ったことはなかった。

その年の夏、初めて自然学校に参加。15、6人の小学生と同数ほどのスタッフ。先生の頭の中にも参加者の頭の中にもプログラムはしっかり組まれているのだろうが、どこにもきちんとしたプログラムはない。それは私が30年続けている絵画教室とどこか似ていた。なんだか波長が合うような気がした。初めて参加した子でさえ、すっかり自分をこの自然学校の中に身を委ねている。一人の若いスタッフの行動が目を引いた。下働きに徹する中、実に細かく気を配る青年。この高山でさえ8月の太陽は暑いが、青年はその暑さの中でも長袖を着、それでも覆われきれないでいる刺青、でも誰もそのことに触れない。そんなことに触れる暇もないほど子供もスタッフもこの自然を享受し、毎日の多彩でエキサイティングなプログラムに全身で浸っている。彼に何があってここにいるのか知らないが、彼もまた、ここで救われた人かもしれない。あぶらむの里の下を流れる川で遊んでいる時、彼は先頭に立ち、後ろに続く子供たちに合わせて石を選び、進んでいく。とりわけ幼児に向けてはしっかり待って、その子が一人でできるように細心の注意を払っていた。もともとこの青年はこんな子だったのだろうか。あるいはここあぶらむでの学びによって変わったのだろうか、分からないがここはそう言うところなのだと思った。その時から、私にもここで何かできることがあるかもしれないと思った。もしかすると自然学校との係わりは神様が晩年の私にくれたプレゼントなのかもしれないと。

象に乗ってのジャングルサファリ。ここでくどかれたため逃げようがなかったとか…。作戦勝ちですね！

その年は自然学校を見て過ごし、その中で翌年の壁画制作についてどのようにしたらよいかを考えた。ここに集う子供はその年によって違うが、でも大体こんな感じの子

供たちなんだと、根拠はないのだけれど、なんとなく分かった気がした。その子供たちとスタッフと一緒にさてどんなことができるだろうか。少し意気込んで、数ヶ月間、自分の教室でいろいろと試してみた。自分の中では形になったものもあるのだけれど、さて大郷先生はどんな作品を望んでいるのだろうか。一度先生と相談せねばと思い、2014年の自然学校が始まる2ヶ月ほど前に、再びあぶらむを訪ねた。先生が望んでおられる壁画はとてもシンプルなものだった。それは芸術作品というものではなく、そこに集った子供たちの息づかいのようなもの。大きな子も小さな子も大人も子供も、皆が平等に喜びの中にある姿が表現できている、そんな作品を望んでおられた。


5メートルほどの岩からジャンプ。子ども達は来年こそはと目標にしていることを知った。

さて、当日がやってきた。すでに画面は用意されていた。一般に壁画といえば、建物の内外に関係なく壁面に直接描くことが多いのだが、支持体としてきちんとした木製の画面が用意されていた。それもさすが木工所を抱えるあぶらむ、壁板と同じ立派な板材を繋いだものが用意されていた。おまけに描く前から額装されている。描く子供たちが棘など刺されぬよう綺麗に磨いてあった。

自然学校2日目。しかし自然学校はまだ始まったばかりなのに、一体どうやって導入したらよいものか。子供たちの自然学校に対する期待をそのまま描くより他ない。とりあえず部屋ごとに別れて、グループで取り掛かることにしたが、そのうち皆勝手に始まった。疲れた者は休み、止まらぬ者は夢中で描き、静かに見守っていたはずのスタッフもいつしか夢中の人になり、休んでいた子もまた復活し、気が付いたら額も何もかもカラフルな一枚の絵ができあがっていた。決してそれこそ芸術的な絵ではないけれど、それはまぎれもなくあぶらむに集う子供とそれを見守るスタッフ、そう、「あぶらむ自然学校2014」の素直な息づかいを感じる絵ができあがった。そして、それはあぶらむの丘の中腹、作業棟の入り口壁面に飾られた。冬になると雪に覆われる、森閑とする中で黙々と作業をする人を、この絵が待って、少しでも元気付けてくれるよう願った。

2015年、今年。大郷先生はまた同じ大きさの木製の画面を用意して、私を待っていてくださった。そして今年もまた昨年と同じように体当たり作戦で一枚の絵ができた。「あぶらむ自然学校2015」だ。昨年と違うところは、子供たちが描いたことは同じだが、子供に返った大人も結構参加していることだろうか。あぶらむとはそういうところなんだ。できあがったものは、あぶらむの入り口、そう道路に面した所に今度は飾られた。「ここはあぶらむの里・こんな元気の出るところですよ！」と言いたい気持ちがびっしり込められている。ここを訪れる人にも、まだ訪れたことのない人にもそう呼びかけている。きっと雪の中でも映えるだろう。

来年、それは分からない。でもまた何かできることはあるだろう。私はまだあぶらむ初心者、あぶらむ初級だから、もう少し使ってもらえるような気がする。

さくら道　フランスの旅

昨年11月、フランスのウルトラ･マラソン･ランナーで、さくら道(名古屋－金沢250km)に過去4回出場しているJ.J.メリエンヌさんより、彼地でのウルトラマラソン大会に招待したいとのメールが入った。

「La Mythigue Run」、フランス語のわからない私だが英語のMythologyであることは想像できた。「神話的ラン」というこの言葉にひかれこれも国際交流の一つと、私はその招待を受けることにした。

大会は6月2日～6日までの日程、その前日にパリに来てほしいという簡単な内容だった。

フランスまでの交通費は自前だったので、私は卒業生の宮田君に頼んで安い飛行機を探してもらった。その結果、私の故郷富山－ソウル－パリ往復55,000円、アシアナ航空で決まった。沖縄へ行くよりも安いこの値段に、途中どこかで飛行機から落とされるのではないかと心配した。ソウル経由ならば韓国の友人、知人とも旧交を温めることができる。私のフランス行きはこうして始まった。

ところが全ての準備が整い、出発まであと10日余というところで突然に大会中止の連絡が入った。航空券も手元に届いているというのにそれはないでしょう。何よりも私のために集まってくれる韓国の友人達に申し訳なかった。また今回のフランス行きは、私が関わっているさくら道に12回も参加してくれたティエリー・フッコーさんの見舞いも主目的だったので、私は予定通り出発することにした。旅の目的は「さくら道の友を訪ねて」とした。

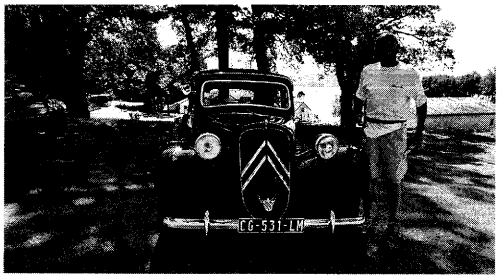
ソウルでの3日間は李ジョンソンさんの案内で昼は朝鮮王朝時代の城壁ウォーキング(旧ソウル市内一周18km)、夜は教会友人やさくら道ランナー達との宴会3夜。フランスに着くまでにソウルで沈没するのではと周囲は心配していた。何しろ韓国の人の宴会は半端じゃないですから……。

ソウル城壁ウォーキングは興味深かった。16世紀当時の石壁、その後に石積みされたもの、そして現在修復されている箇所。韓国政府は完全修復し、世界遺産の指定を目指すという。時代における石積み方法の違いや、旧いソウル、新しいソウル、また北朝鮮のスパイ侵入時の銃撃戦の跡など、城壁は歴史の生きた証人だった。近い将来あぶらむでもこのソウル城壁ウォーキングの旅を企画催行しようと思っている。

6月3日、夕方パリ着。空港への迎えの人がいなければ私の旅は万事休す。どこへどのように行けばよいのか全くわからないままでの出発だった。「迎えの人」だけが頼りだった。不安をかかえたまま税関を出た、何と目の前に「Welcome Mr.（ムッシュ）Hiroshi OHGO」という大きな看板があるではないか、私にとっては「地獄で仏」といった心境だった。迎えに来てくれたパトリシアさんは英語はダメ、私のフランス語は「ジュテーム」だけ。お互いニコニコ笑顔を交わすだけで全く無言。ナビを見ると目的地まで415kmと表示されているではないか。私はそんな遠くにまで連れて行かれることをはじめて知った。

フランスの日没は午後10時半、そのことにまずびっくり。どこまでも続くなだらかな大地、地平線に顔を出した満月の大きかったこと大きかったこと、ウォーウォーと感嘆の連続

だった。アウディのセミ・スポーツカーで迎えに来てくれたパトリシアさんは400km余を4時間で走った。リモージュという街で私は最初の目的の人、フッコーさんに渡された。何と彼は1951年製のシトロエンで迎えに来ていた。最新型の車と63才のオールドカー、この取り合わせ。フランス人の「粋さ」の先制パンチだった。

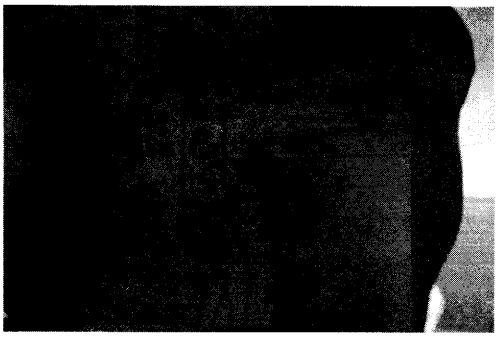


1951年製のシトロエンでドライブ。当時のバッテリーは6V。エンジンがかかる度に喚声をあげるしろものだった。でもどことなくリッチな気分。

リモージュの街から車で40分ほどの郊外、フッコーさんの家は石造りの古い農家屋だった。築400ほどといっていたがその風格たるやヨダレが出そうだった。古き良きものをこの現代の中に活かし大切に用いていく姿に教えられることばかりだった。

彼の家から車(現代車)で3時間ほど離れたところに、もう一人のさくら道ランナーがいた。ミシェル・ボアロンさん74才を訪ねることになった。代々その村の村長さんだったとのこと、古い訪問者名簿の中にナポレオンのサインがあったのに驚いた。

彼は橋やビルなど大型建築物の構造計算の技術者で、その道ではフランスでも有名な人だった。名古屋－金沢までのさくら道250kmを走ったことが彼の人生にとって一番の思い出といい、その記念にといって彼は突然上半身裸になりだした。何と背中から脚部にかけて見事な「さくら道タトゥー」。私は唖然としてしまった。タトゥーといえばライト感覚だが、昔感覚人間の私にとっては「入れ墨」は前科者の世界。さくら道のことを生涯忘れないためにと陽気にはしゃぐミシェルさん。「それでは日本に来た時温泉に入れてもらえないヨ」と言ったら、なぜだ！なぜだ！の質問ぜめ。「入れ墨・タトゥー」をめぐってのしばしの国際論争と相なった。それにしてもタトゥーとしてからだに刻み込むまでの思い出って、彼にとって何だったのだろうか。私の方が宿題をもらった感じになった。


ミシェルさんの背中に彫られたタトゥー。遠山の金さんの桜吹雪のような派手さはなかったが…。しかし、彼のさくら道へのおもいはしっかりと伝わってきた。それにしてもイレズミまでとは…。

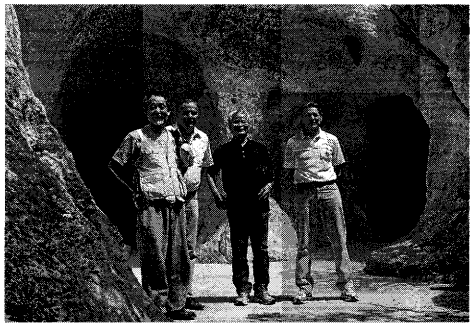
フッコーさんのお見舞い訪問を終えた私は出発直前にウルトラ・マラソン大会中止になった本来の目的地Les Eyzies（レ・ゼジー）に向かった。

ホストとして私を迎えてくれたのがさくら道に4回出場したJ.Jメリエンヌさんだった。彼は何とこの町の助役さんだった。

滞在中の私のスケジュール、「明日は市長の歓迎レセプションから始まります」ということでビックリ！私めごときのためにと固辞したが、すでに決まっていることでとあっさりと押し切られてしまった。市庁舎のレセプション会場には職員や村の代表など50人ほど集まっていた。「私たちの市長です」と紹介されたそのご人、ニコニコ笑顔で私に握手を求めてきた。どこかで見たような顔。「ようこそ我が町へ、その節はお世話になりました」、それが市長の開口一番

だった。ことの次第はこうだった。ウルトラ・マラソンに入れ込んでいた助役のメリエンヌさん、将来自分たちの町でも大会をと企画し、それならば一度視察にと市長を伴ってさくら道に来たのだった。さくら道に参加する海外ランナーは時差調整等もあり、あぶらむで4～5日間滞在して大会に臨むのである。「あなたのところでの滞在、日本での一番の思い出となりました」と市長さん、何か失礼なことはなかったかと冷や汗ものの私。表裏もなく、誰に対しても公平、対等に振る舞うことの、このあたり前なことを再確認させられた一時だった。

さて、ものごと知らないということは恥ずかしいことで、私の滞在したこのLes Eyzies（レ・ゼジー）の町には超世界遺産ともいうべきものがある町だった。一つは4万年ほど前と思われる人類の祖先クロマニヨン原人の遺骨が発見されたこと、そしてもう一つは「ラスコーの洞窟壁画」が存在する町だった。特にこのラスコーの洞窟壁画を見るために世界中から人が集まって来る。一日の入場者数は80人に限定、予約等はなく並んだ者順とのこと。そのために早い人は深夜から並ぶとのこと、また代わりに並んで順番を取るアルバイトもあるということだった。


ラスコーの洞窟壁画の入口。撮影可能はここまで。カメラはじめ全ての持物は左手の洞窟にあるロッカーに預けなければならない。

「ラスコーの洞窟壁画」といわれても、それ何という私の知的レベル、そういえば中学校のころの教科書に牛の絵が載っていた程度、そんな私に洞窟への特別招待。通訳の鈴木勝さんなど4人という少人数で1時間余の特別鑑賞となった。「あぁーあ、猫に小判、ブタに真珠だなァー」と思いながらの私だったが、でも見ているうちに4万年ほど前に描かれたという壁画にいつしか圧倒されていった。

ワインで有名なボルドーから南へ車で3時間ほどのところにある町レ・ゼジー、フランスの田舎の人々は人情に厚かった。大切に大切にもてなしてもらった。しかし、あまりにも大切にしてもらったため、私の胃袋は悲鳴をあげた。フランスの人は牛のように胃が4つあるのではないかと思うほどよく食べた。それも脂こってりしたものを。朝昼晩と何かにつけて出てくる高級食材「フォアグラ」にはもうまいった！特に最後の夜、前菜としてフォアグラのステーキが出た。それも一人前3枚も！通訳の鈴木さん、「普通は1枚、どんなに多くても2枚。3枚なんてフランス生活50年になる私も初めてのこと、あなたはよっぽど大切にされているのですヨ」とのことだった。大切にしてもらっているのはよくわかったが、さすがに連日のフォアグラと最後のシメとばかりのステーキ3枚にはグロッキーとなってしまった。その後に続くカモ肉など料理の数々、前菜だけでKOされてしまったみじめさ。ちなみにフランス滞在中一番あっさりとした食べ物は牛ステーキだった。やはり私は大根おろしとオジャコが一番口に合うようです。

そんなこんなのフランスの旅、実に多くの人に助けられてのささやかな国際交流の旅でした。

P.S.　ちなみに「La Mythigue Run 250km」が大会直前になって中止となった理由は、主催者レ・ゼジーの市長と政治的に対立しているコース途中の県知事が通行許可しなかったとのこと。どこにでも似たような問題はあるのですね。

『第３期通常総会　開催報告』

第３期通常総会を 2015 年３月に開催いたしました。今回は、初めてあぶらむの里で開催し、多くの方に参加いただきました。心よりお礼申し上げます。

日　　時：2015 年３月 21 日(土) 16：00～17：10
場　　所：あぶらむの里　諸魂庵
出 席 者：27 名
総会次第：
(1) 開会挨拶・役員紹介
(2) 議長・議事録署名人・書記の指名
(3) 定数の確認
(4) 議案
・第３期活動報告
・第３期決算報告及び監査報告
＜貸借対照表＞
資産合計79,532,595円（流動資産30,020,391円　固定資産49,512,204円）
負債合計　188,899円（短期借入金188.899円）
正味財産79,343,696円（うち当期正味財産増加額7,064,640円）
＜収支内訳＞
収入合計18,343,513円（会費収入1,833,000円　寄付収入8,400,000円
研修収入4,977,519円　他）
支出合計11,278,873円（減価償却費を除いた実質支出10,149,058円）
当期収支 7,064,640円（減価償却費を除いた実質収支8,194,455円）
・第４期活動計画
・第４期予算(案)
＜収支予算案＞
収入合計14,500,000円（会費収入2,500,000円　寄付収入5,000,000円
研修収入6,000,000円　他）
支出合計12,820,000円（減価償却費を除いた実質支出11,970,000円）
ものづくり作業棟建設費用1,500,000円

当日の資料、議事録は、あぶらむの会ホームページに掲載しています。
http://www.abram-no-kai.com/
画面右メニュー　"会員専用ページ"（パスワード：UTE48）にログインして、
画面右メニュー　"2015年総会・講演会報告"をクリックしてください。

『第４期通常総会について』

今回は、東京で総会を開催させていただきます。多くの方のご参加をお待ちしています。

2016年度会費納入いただいた会員各位に対して、１月下旬～２月上旬頃に第４期通常総会の正式案内状を郵送させていただきます。

日時：2016年３月５日(土) 16：00～（15：30～受付開始）
場所：日本聖公会　神田キリスト教会(東京都千代田区外神田3-5-11)
議案：第１号議案　第４期活動報告、決算報告、監査報告
　　第２号議案　第５期活動計画、予算案

2015年　あぶらむこの一年

１月・雪降りの元旦、２日から除雪開始。
・10～12日　雪祭り、沖縄からの参加者多数。
・除雪の合間に、ものづくり作業棟の内壁はり。
・雪、雨、凍結で屋根の雪が巨大な氷の塊となり、そのためスタッフ・ハウスのひさしが折れる。

２月・ほぼ毎日のように屋根の雪おろし。今冬の雪、これまでで一番重い。
・日本聖公会横浜教区　北総宣教協議会信徒修養会にて講演。
・イエスのカリタス会修女２人研修会下見のため来里、一緒に屋根に上がり雪おろし。
・雪がグサグサに腐りはじめる。道開き（道路の地面を出すこと)、春間近か。

３月・今年も「春告魚」(イカナゴのクギ煮)、味噌づくり開始。
・14日　春一番の会。　19日　一晩中雨、一気に雪どけが進む。
・21日　第３回目　通常総会、あぶらむの里にて開催。参加者34名。
・作業棟の内壁はり終了。

４月・ミツバチの巣箱設置。春、活動開始。
・17～20日　第22回さくら道国際ネーチャーラン開催（名古屋－金沢250km)
・24日　ネパール大地震発生
・27日　畑、田打ち、いよいよ農作業開始。

５月・材料小屋建築用材の切り出し開始。
・宿の駐車場整備。
・15～17日　イエスのカリタス会研修
・22日　田植え　23日「野休みコンサート」、トランペット　杉木峯夫、津軽三味線高橋竹山共演コンサート。

・31日～６月16日　韓国、フランスの旅。

６月・野麦峠ウォーク、夏の子ども自然学校等の準備。

７月・18～20日　野麦峠スタディー・ツアー。台風11号の接近で中央線運行中止、うまく集合できるか不安な中での開催。しかし終わってみれば全てが恵みの中にあった。よい内容のプログラムだった。参加者19名。

・27日　里山生活学校夏季短期留学開校、参加者　小学生３名。

・28日～８月２日　立教小学校グローバルエクスカーション、あぶらむプログラム。

８月・２～４日　立教大学 PRC 合宿研修。

・４～９日　あぶらむ夏季里山自然学校、参加者　総員32名。

・18～19日　あぶらむツーリング・クラブ　能登島宿泊ツーリング。

・22日　第８回桂歌之助落語会

・27日　田の水を止める、同日より宿の大屋根トタン塗装開始。

・30日　ジョシュアさよならサイクリング（富山まで76km）。１年半、ボランティアとしてあぶらむを助けてくれたＪ君が帰ることとなった。

９月・２日　日本聖公会東北教区の越山司祭来里。来年夏、福島原発被災地の子ども達のあぶらむキャンプの可能性の打合せ。

・４日　岐阜少年友の会　あぶらむの里視察研修

・９日　関東、東北地方、50年に一度という大雨。飛騨地方は被害は軽微だった。

・19～21日　渋谷聖ミカエル教会キャンプ。プログラムに松たけ狩りを入れたら何と８本ゲット！おいしくいただきました。

・26日　稲刈り、千本しめじ大量にゲット。匂い松たけ味しめじというだけあって、しめじごはんは最高でした。

・宿大屋根のペンキ塗りや稲刈りなどハードな月となりました。

10月・９日　脱穀、55袋とやや不作年というのにあぶらむ史上最高の収穫量。

・10～12日　秋の特別企画、WAYNO アンデスの風コンサート、天生原生林ウォーキング、富山寿司栄さん職人の味、参加者19名。

・14～15日　JA 看護学校あぶらむ宿泊研修

・16～18日　福島原発被災地訪問

・26日　初霜おりる。しかしこの秋は全体的に暖か気味。

・雪囲い等、越冬準備開始。

11月・新築作業棟に付属する材料棟建築開始。

・17日　１年半ぶりに家裁少年が来る。

・21～23日　落葉はき大会

・大根、白菜等、冬野菜収穫。本格的に越冬準備に入る。

12月・10～12日　沖縄愛楽園訪問

・12日　あぶらむの会理事会

・あぶらむ通信発行

・23日　クリスマス会

2016年　こんなこと（行事予定）

1月・９～11日　あぶらむ雪祭り（沖縄からの参加あり）
2月・里山雪上ウォーキング（随時）
3月・５日　第４期あぶらむ通常総会、場所：東京神田キリスト教会
　・12日　春を迎える喜び「春一番の会」
　・19～21日　上高地雪上ウォーキング（予定）
4月・15～18日　第23回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）
5月・21日　田植え
7月・16～18日　初夏の天生原生林ウォーキング
　・あぶらむ里山生活夏季短期留学
8月・３～８日　あぶらむ里山自然学校
　・27日　第９回桂歌之助落語会
9月・16～20日　韓国ソウル城郭ウォーキングと歴史の旅
　・24日　稲刈り（予定）
10月・８日　第９回 WAYNO アンデスの風コンサート
　・９日　里山ウォーキング（場所未定）

韓国ソウル城郭ウォーキングと歴史の旅

ソウル市内には16世紀の朝鮮王朝時代の城郭が今も残っています。

長い歴史の中で戦火等で破壊されたところもありますが、近年復旧が進み、将来世界遺産にと国をあげて取り組んでいます。一周18kmを２日間に分けて歩き、ソウルの過去、現在に触れてみたく思います。また、最終日には板門店か統一展望台を訪ね、未だ戦時下にある北朝鮮との現状を学んでみたく計画しています。尚、現地案内は韓国メソジスト教会 李ジョンソン牧師です。また、韓国の教会関係者も参加予定です。ご参加下さい。

期日　2016年９月16日～20日（４泊５日）

お問い合わせはあぶらむの会まで

寄付者一覧（'14年12月14日～'15年12月6日）敬称略

相川喜久枝／愛知聖ルカ教会／安藝淳二／池田正毅／市川聖マリヤ教会／一柳典利・百／伊藤浩子／今関公雄／井本正樹／岩崎静子／ JMS 代表 岩沢満／岩田幼稚園／鵜川久・貴子／鵜川雅行／江見淑子／大郷穣・順子／大城恵子／太田恭子・鈴木みち子／太田亟慈・純子／大西修／岡田賛三／片桐多恵子／片山吉章／加藤寛／金子眞／河合由美子／川村須美子／神原一二三／岸村信治／北山和民／吉川恵子／金城由美子／串間千秋／久保田豊／窪寺俊之・幸子／小島正則／越山健蔵・岸本望／小柳證／財満研三郎・由美子／坂尾新一／坂本吉弘／櫻井淳司・紀子／佐々木慶太郎／笹部昭博／佐藤芳子／澤野弥生／塩田純子／静岡聖ペテロ教会／静谷英夫／篠田泰之／白神雄／新開春樹・桂／島文子／島袋洋子／杉木峯夫／鈴木武司／須間栄津子／沖縄聖マルコ保育園／蒼生寿美／㈱アリミノ 田尾兵二／高瀬留美／高橋秀／メディアプランニング 高田年雄／高柳真／武原司奈／田中洋子／田辺聖公会愛の園シオン会／谷章子／丹安紀子／中部学院大学宗教委員会／坪島行雄／寺田信一／東京セントポールライオンズクラブ／遠山章夫・秀子／富永紀子／富山聖マリア教会／長尾文雄／中島務／中村力・英子／中村洋／中村芳枝／日本聖公会ナザレ修女会／新家恵子／長谷川秀司／長谷川牧子／畑井正春／畑野榮一・寿子／速水直子／原川恭一／福岡女学院中学高等学校／藤井和彦／古川齊／古沢伸雄／北総宣教協議会／星野一朗／星野八千代／前田晃伸・容子／前田康雄・彰子／正木寛／松井勲／松尾正枝／松平信久／松戸聖パウロ教会／三沢悠子／宮澤あや子／宮田洋子／宮本房江／宮本真紀／宮脇加代子／宗像千代子／森本晴生／レーマン幸子／八木克道／矢崎ふき子／山田益男／湯田啓一／西田浩子

物品寄付者一覧（'14年12月14日～'15年12月6日）敬称略

㈱アリミノ　田尾兵二／㈲あんしんプランニング　中村洋

ガヴィス基金（'14年12月14日～'15年12月6日）敬称略

竹村真紀

ガヴィス基金　本年度支援先

NPOアジア子どもの夢／ネパール大地震支援のため／北海道家庭学校

2015年会費納入者一覧（'14年12月12日～'15年12月6日）敬称略

相澤牧人／赤井充也／赤松道子／秋月慎直／朝比奈誼／朝比奈時子／味岡敏江／穴井悦子／雨宮大朔・寿子／荒井優仁・彩月／新垣タケ子／飯島千津子／飯田孝太郎／井澤夫佐子／石原つや子／一柳典利／井出米蔵／伊藤幸史／伊東日出子／伊藤文雄／猪野愈／今関公雄／入野豊／岩佐葵史子／岩坪哲哉／岩坪瑞枝／岩間光雄／上田敏明／上村誠・洋子／鵜川久・貴子／梅沢雪子／江洲良秀／太田勝博／太田喜元・昌子／大城恵子／大平和子／大房健樹／大八木米子／岡登信義／岡野峻／小川卓／尾崎和廣／小野裕・伸子／小野田誠次／小野田恵子

／笠原雅子／片岡義博／片桐多恵子／勝山千里／門谷成美／金子眞／加納美津子／唐木田麻起子／河合昇／河合由美子／川上美砂／川上玲子／川口弘二／川口暁子／河田健二／岸井孝司／木島出／岸元忠義・静江／北昌子／鬼本博文／久世治靖／倉石昇／倉辻明男／倉持昌弘／栗山盛雄／栗山洋子／黒田則子／小池直子／小泉恵子／小林賢三／小林信夫／小林加代／小林賢三／小松純一／小柳證／斉藤美登里／斉藤寛明／酒井厚子／櫻井智則／笹岡淳也・由紀子／佐々木国夫・紀久江／佐藤純／佐藤哲典／佐藤敏子／佐藤裕／佐藤芳子／座間幹生／澤野弥生／塩田純子／篠田泰之／篠宮慶次／柴原薫／渋澤一郎／渋谷真理／島文子／島袋洋子／清水靖夫／志村弘子／下田英一／下畑幹／城下彰／菅原勝美・美穂子／杉浦幸恵／杉村進／杉本良平・和子／鈴木信子／鈴木武次・保子／鈴木千絵／鈴木正士・裕子／鈴木康邦／鈴木康仁／ストップス静江／聖母訪問会／仙敷正俊／高沢孝子／高瀬留美／高橋保／高濱友理江／高柳真／竹中浩／武原正明／竹村真紀／田中篤／田中孝子／棚橋忍／棚橋美江／谷市三／谷孝子／田部博文／俵里英子／丹安紀子／筑井宏子／佃寿子／寺谷恵美子／桃原松五郎／時高照子／泊哲次／富永隆史・敦子／豊永泰子／直井雅子／永井深雪／長坂尚／中台信子／長縄年延・光子／長野純吉／中野えり子／長谷幸雄／中山美世子／西垣正子／西川照子／西口晃／西口喜久枝／西村斐佐代／西村正和／根本利子／野崎久子／野田修助・和子／土師晴子／羽柴加寿代／長谷川秀司／長谷川俊夫／畑井正春／畑野榮一／比嘉良侑／日暮直子／日野忠市／福田桂／福田亜矢子／福田一太／藤井誠・ひろ子／古市進／古川秀昭・昭子／古澤昭夫／星野一郎／星野直子／前田眞智子／前田晃／前田広世／前田晃伸／前田容子／松居勲／松岡龍哉／松田捷朗／丸山千早／溝際庸介／三原エイ／三村英夫／宮崎秀貴／宮脇加代子／宗像千代子／武藤六治／室岡恵／百井幸子／衆樹歩実／八木克道／矢後和彦・正子／保井孝／矢野裕史／山内寿美子／山口泰生／山田益男／山本泰子／吉野美智子／吉野康／若園紘志

新規会員（'14年12月14日～'15年12月6日）敬称略

飯島千津子／岩佐葵史子／勝山千里／鈴木武次・保子／ストップス静江／日暮直子／衆樹歩実／山本泰子

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。